

---

# ツバサを持つ者

寸木豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツバサを持つ者

### 【Nコード】

N2017T

### 【作者名】

寸木豆

### 【あらすじ】

よくある異世界召喚になると思います。もちろん魔法あり、ドラゴンあり、エルフあります。妄想が止まらなくなって書いたものですので文章としておかしいなどありましたらご遠慮なく感想にてお申し出ください。

## プロローグ

最初に感じたのは冷たい、そして次に感じたのは痛いだった。身体を起こし周りを見渡せば暗くてすぐそばしか見えなかった。

目が慣れれば見えるだろうと思いつつと伸びをした。

伸びをした時に気付いたのだが湿った空気の匂いがする。ふと下を確認してみれば自分が乗っているのは石台の様だ。

寝る前の事を思い出して何かおかしい、俺はこんなところで寝ていない。自分の部屋で寝ていたはずだ。

何より今の服装が寝巻である事が証明だ。

ようやく目が慣れてきたので急いで周囲を確認する。

石畳がどこまでも続いているかのように感じるほど広い部屋の中心に、存在感を異様に放つ祭壇がある。

その祭壇は一对の女神像の彫刻に挟まれている。一流の匠より作られたのだろう細かなところまで細工が入っている。

初めて見た者は感動のあまり止まってしまうのではないだろうか、繊細なのにどこか力強さも感じるといふ矛盾をはらんでいる。

祭壇の近くには人だかりが出来ているのだが、祭壇を見にきた様には見えない。皆一様に切羽詰まった何かに縋る表情をしている。

その中に一人落ち着いた雰囲気を保ったまま豪華な服装に包まれた男性に話しかけていた。

祭壇に見入っている場合ではないと人だかりに気付かれないように石台の裏に隠れる。

石台の側面には祭壇と同じ女神が彫られているようだ。

気持ちを落ち着けて逃げなければ、そう逃げなければいけない。

先ほど見た人だかりの風貌があきらかにおかしかったからだ。

黒い甲冑を身に纏い豪華な服装に包まれた男性に控えて居るし、

中世ヨーロッパの服装の男が数人にばらばらにローブを羽織っている人物がたくさん居た。

頭のおかしなオカルト教団にでもゆうかいられたのかもしれない。あまりの恐怖に震えるからだを必死に抑えながら部屋の出口を探す。

奴らに見つかからない様に四つん這いで進んで行く、少し進んだところで壁まで着いた。

ここまでは祭壇の明かりが届いていないから物音をたてない限り大丈夫だろう。

壁に沿って静かに歩くとその先に扉が見えてきた。

ようやく出られる、そんな喜びの気持ちをごらえながら扉に近づいた。

取っ手らしき場所をつかんで押してみたがびくともしない。引いてもみたがやっぱり開かなかった。

ようやく見つけた希望を逃した私はその場に崩れ落ちた。

遠くの方でゆれる明かりを見つめた。まだひとつ扉をみつけただけじゃないか、これだけ広い部屋なのだからほかにも出口があるはずだとそんな風に自分を奮い立たせた。

そんな時やつらがざわめく声が聞こえてきた。

どうしたのだろうと、声のする方へ視線を向けてみる。そうすると最初に俺が眠っていた場所に、何人かが駆け寄り大声を上げていた。そして、ぼろいローブの男がなにかを宣言すると部屋全体に明かりが満ちた。

やばい！気付かれた、と思うと同時に俺は駆け出した。

ざわめきが大きくなるのを背中を感じながら必死で走る。

そうすると最初に見つけた扉のちょうど正面のあたりに扉を見つけた。

もう少しで扉にたどり着くというところまでやってきた。

取っ手に手を伸ばした瞬間、風切り音がして後頭部にどんっとう撃が襲った。

ほんの数秒、意識が飛んでいた様で視界が朦朧とするなか囲まれているのが分かった。

甲冑の男がなにか俺に話しかけているようだが、何を話しかけているのかわからなかった。

このネットが発達した世界で、何語みたいだなとすら感じられない言葉を話していたからだ。

辺境の町の言葉まで網羅しているわけでもないのでありえない事もない。

なぜこんなに他人事のように考えているのだろうか、不思議に思いつながら考える。

俺が言葉を理解していないと気付いたらしく、甲冑の男がぼろいロブの男に指示を出した。するとぼろいロブの男も、何語か分からない言葉を唱えながら俺の頭をつかんだ。

頭に激痛が走り苦しみもだえる。内側から割れるような痛み。

汗がぼつぼつと床に落ち大きなしみを作っていた。

どれくらい時間がたったのだろうか、周りをみるにほんの数秒だったのかもしれない。

痛みが引いてきたので息も整ってきた。

今の頭痛はなんだったのだろうか、と黒いロブの男をにらんでいると、甲冑の男の声が聞こえた。

「私の言っている事がわかるか？」

静かにそう言った。

「は、はい」

さっきまでひと言も理解できなかった奴らの言葉が理解でき、ずっと耳になじんでいた事に驚きどもりながら返事をしてしまった。

「ふむ、きちんと作用したみたいだな」

作用した？という事はさっきの頭痛のいつているのだろうか。

「では君たち彼を贅の座へと戻しておきなさい」

その命令により先ほどの頭痛で身体が動かない俺は、両腕をつかまれ最初の石台へと引きずられていく。

「おい、贅つてなんだよ！なあ！」

俺の怒鳴り声が聞こえてないかの如く進んで行く。

結局いくら叫ぼうとも反応も返されず、石台に寝転ばされたのだ。  
った。

「でわ、先ほどの疑問に答えようか」

豪華な服装の男のもとから、甲冑の男がこちらに向かいながら言  
った。

「早速だが、ここがどこかわかるかな」

「目が覚めたらこんなところにいたんだ、分かるはずないだろ」

甲冑の男がすこし不思議そうな顔をした気がした。

「簡単にいってしまえば、きみは我が国を救う為に枯れた世界から  
引きずり下ろさせてもらった」

まったくもって意味がわからない、枯れた世界ってなんだ。映画  
や小説の様に異世界に召喚されたとしても言うのだろうか。

たしかにさっきの頭痛のあれは魔法に見えなくもないがただ演技  
して俺を騙しただけかもしれない。

「枯れた世界ってなんだよ」

俺は吐き捨てるように言った。

「枯れた世界とはその名の通り、マナが枯れ果ててしまった世界の  
事だ」

マナというのはあれか、ゲームとかマンガによく出てくる奴か。  
世界に存在する魔法の源とかいうのだったかな。

「世界がどうっていうのは分かった。俺がこの国を救うってのはど  
ういう事なんだ。正直俺は運動神経とか全然ないんだけど」

ライトノベルの様な展開にすこしわくわくした感じで聞いた。

「君は何もしなくていい、ただ君という存在があるだけでいい」

勇者になって魔王を倒したりはしないのかと、初めの恐怖を抱い  
て逃げ出したりと恥ずかしい行動を忘れたかのように落ち込んだ。

「理解できたかな」

「ええ、まあ」

甲冑の男に問いに元気をなくしかまま返事した。

「納得いった様で何よりだ。さて、儀式にはいるうか」

先ほどからなにかの準備をしていたぼろいローブの男達がより一層忙しそうに動き始めた。

「なんの儀式だ」

疑問に思ったことをぼつりと呟いた。

「しばし待て」

甲冑の男に聞こえていたみたいで答えてくれた。

「準備が完了致しました」

「ご苦労」

返事を短く返し、佇まいを正し高らかに宣言する。

「これより救国の儀式を執り行う」

豪華な服装の男と俺以外の、部屋にいる人間がせわしなく動き始めた。

ぼろいローブの男達は祭壇と中心に円状に囲み呪文と朗々と唱えている。

甲冑の男はいつの間にか俺の手と足に枷をはめていた。

「おい、なんなんだよこれ」

「ん？はじめに言っただろう、贅だと」

そう言われて思い出した、贅の座に戻しておけとぼろいローブの男に言っていたのだった。

「君はな、この世界と枯れた世界の繋ぎになってもらうのだよ。君という存在を世界が取り戻そうとする力を利用して、常時通路を開けておく為の儀式だ」

その事を聞いて愕然とした。

「それって俺じゃなきゃだめなのか。なんで俺なんだよ」

「いや、君でなくとも枯れた世界の人間なら誰でも可能だ。君が落ちてきたのはただの偶然だ」

ふざけるな、偶然で生贄なれだなんてなれるわけがない。必死に枷を振りほどこうと手足に力を入れてもがく。

「無駄な事はやめた方がいい、枯れた世界の人間が鉄製の枷を壊せるわけがないからな」

哀れなものを諭すかの様に言った。

「諦められるわけがない、突然つれさられて生贄になれだど。誰が喜んでなるか」

憎しみをこめて言い放つ。

「それもそうだな」

そう言つて腰にさした二本の剣の内の一本を抜き、逆手に持ち頭上へと振り上げそのまま勢いよく突き刺した。

あまりに突然の事に俺は何が起こったのか分からなかった。

振り下ろされた剣を、柄から視線を降ろしていくと俺の左胸へと続いていた。

肋骨の間を通過して刺さった様でたいした衝撃もなく、すんと突き刺さっていた。

俺は刺されたみたいだ、そう思った瞬間火で焼かれる程の熱さを左胸に感じた。

不協和音で響く心臓の音がやけに大きく聞こえて、胸の熱さもじわじわと体中に広がっていく。

「ぐっ、がああああ」

自分の声とおもえない声で叫ぶ。

「聞こえるかね、君」

苦しみの中、聞こえてくる声の方へ向くと豪華な服装の男がそばに立っていた。

「私の名はヴラドという、この国の王である。そして、君に剣を突き刺したのが我が騎士ランドである」

「いまさらっ……それが、どうした……」

息も絶え絶えに返答する。

「ふむ、謝りはせんよ。ただ存分に我々を恨み、憎しんでくれてかまわんよ」

それだけ言つて元の場所に戻って行った。

「さらばだ、少年」

ヴラドの後ろ姿をみていると甲冑の男、ランドがそう言った。

残ったもう一本の剣を、両手で持ち頭上に掲げていた。

「俺はこんな事認めない、絶対に認めない。俺が救ったというなら俺が滅ぼしてやる」

最後に残された抵抗として、呪詛を撒き散らす。

ダンという音がして視界がいきなり変わった。そして目に留まったのは祭壇にある一对の女神像で、憎悪に染まった心でも美しいと思えるのはせめてもの救いなのだろうか。

## プロローグ（後書き）

書いていてあまりにも上手くかけずショックでした。それでも続きが読みたいとおっしゃってくださる方がいましたら早いめに次話を完成できるようにしたいと思います。

## 第一話 災難

雨上がりの朝、少し肌寒く感じる通学路を無意識に歩く。さすがに三年目ともなれば眠気さでボーっとした頭でも問題なくかよえるもんだ。

だいたい同じ時間に家を出て、同じ場所で同じ人とすれ違う。いつもより早い目にすれ違うと、あれ？遅いかなと疑問に思い時計を確認する。

この通学路とも一年もすればおわかれだなとだんだん覚醒してきた頭で想いを馳せる。

「よう、おはよう」

後ろから駆け足の音とともに挨拶をされた。

「ん。おはよう、朝からげんきだねえ」

振り向きそう挨拶を返す。

「違うな、お前が元気なさすぎなんだよ」

失礼な事を言っているこの男は、幼馴染の山県信士やまがた しんじといって学生生活の中でも一番仲がいい友達だ。

「俺は元気がないんじゃない、省エネモードなだけだ」

「そんなこと言って、省エネモードのお前以外みたことないぞ」

他愛ないやり取りを続けながら歩いていると学校に着いたようだ。信士と一緒にクラスメイト達に挨拶をしながら窓際の席に着く。

「おはよう、二人ともギリギリだよ」

「信士君、晶君おはよう」

かわいらしく注意してくるのは結城友実ゆいけ とみみで俺たちの事を君付けで呼んでいるのが工藤美咲くどう みさきである。

美咲は俺と信士の幼馴染で、通う高校も俺たちについてきたらしい。らしいというのは美咲のお母さんがこっそり教えてくれたからだ。

そして、友実は俺達の中に果敢にもやってきていつの間にか馴染

んでいた。いまでは最初からいたんじゃないかって思うぐらいだ。  
担任の教師が入ってきてホームルーム、授業と進めていく。

ここは窓際の席なのでほんのりと温かい日差しが心地いい、通学  
路で冷えた身体にこうかばつぐんだ。

晴れてきていい天気だなとうとうとした状態でがんばって授業  
を受ける。

十四年前の空が割れた日以来、人類は新たな能力を得ました。そ  
れはいままで小説や漫画の中の話であると、誰もが思っていた魔法  
でした。

空が割れた日に世界全土を魔力光が満たし、機器に異常をきたしま  
した。その日以来、誰もが魔法を使えるようになりました。中でも  
女性が大きな魔力をもっています、男性の方はほとんどが微々たる  
もので女性ほどの魔力を持つ人はあまりいません。

そして、強力な魔法を使える者は比較的年齢が低い者が多いため  
想像力が関係するのではないか研究中です。

いつの間にか現代社会の授業になっていたみたいだ。

当時はすごい混乱したらしい、原因不明のエネルギーで空が割れ  
るし機械が不具合になるし大変だったそうだ。

まあ俺自身その日の記憶があまりないからよくわからないんだが  
な。

そうして現在落ち着いた各国はこの魔法を軍事利用をはじめ、急  
速に魔法という能力の開発が進みました。いまでは軍人、警察官と  
いった職業は女性の方の比率が勝ります。

おなじみのチャイムが鳴る。

「それでは、授業をおわります」

「そくさと教科書類を片づけ教室を出ていく。」

あつという間に三限目がおわつたなというろとだめな考えをしている。

「なあ、晶。朝のニュースみたか？」

「いや、見てないけど」

そう信士が聞いてくるが、朝はいつも限界まで寝ているのでニュースは見えてなかった。

「私みたよー、神隠しのやつでしょ」

友実がそう返事した。

「そうなんだよ、またあつたんだって」

神隠しとか物騒すぎてやめてほしい。

「でも専門の捜査機関の人たちが捜査してるんでしょ」

「そうなんだけどさ美咲、いまだに全然足掛かりもつかめてないらしいんだ」

「税金の無駄にらなきやいいんだけどね」

相変わらず辛辣だな美咲は。

「あの人も頑張ってるんだよ、そんなこと言っちゃだめだよ」

「それはわかつてるんだけどね」

ここ五年間、目の前で人が消える現象が起き始めている。監視力メラにもその瞬間が映っていたりしている。

現場には魔力痕が残っているので強力な魔法使いなのは分かるのだが、追跡魔法を使っても途中で遮られていて追い切れないそうだな。友実と美咲がなかなか熱い議論を交わしている、その姿を眺めながら俺は眠りに落ち

「そこ、寝るな」

なかった。しかも頭を叩かれてしまった。

「いてえ」

「仕方がない事だ、お前がわるいんだからな」

叩かれた事に不満を込めた目で抗議を示したが却下された。

理不尽な意思表示を試してみたが無視された。

そうこうしている内に四限目のチャイムが鳴り授業がはじまった。

今日、最後の授業が終わり帰り支度を始める。

「じゃあな、俺さきに帰るから」

「また明日」

信士は野球部キャプテンをしている為放課後はいつも忙しい。友実は野球部のマネージャー、美咲は剣道部である。

もちろん俺は帰宅部なのでテスト期間以外は大体ひとりで帰る。

どっかより道でもしようかな、なにかあるかなと思案する。

「いつものとこでいいか」

右手を前に突き出し、人差し指を立てる。

そうすると指の先に、淡い緑色の光がともし細かい数字や記号が現れ魔法陣を作り出す。

一瞬強く光った後、魔法陣が消え俺の身体がふわりと浮かびあがる。

いま使ったのは飛行魔法であり俺が常用する魔法である。

そのままぐんぐん上昇していき雲の高さまで上がって行く。

地上からあまり目立たない高さまで来たところで、魔力で空気を固めベッドを作る。

そうして作り出したベッドにあおむけに寝そべり空を眺める。雑踏の音もなく、ただ風の音がなされるだけのこの空間が俺は好きだった。

小さい頃から俺は鳥にあこがれていた、悠然と何物にも縛られず空を飛ぶ姿に。

魔法が使えるようになってからは空を飛ぶ事しか考えず、この魔法だけを練習してしまでは毎日空の散歩をするのが日課である。

初めのころは大変だったな、魔力が切れると落下するので身長以上の高さにはあがれなかったからな。昔の自分を振り返り笑みがこぼれる。

流れていく雲をぼーっと眺めている。

そろそろ帰ろうかとゆっくりと降下していく。

「きゃー」

地面がはつきりと見えるくらい降りてきたあたりで悲鳴が聞こえた。

あわててその方向をみると男女の二人がいた。

俺が言うのもなんだがさえない感じの男の子が、光の塊に体飲み込まれている途中だった。そして、女の子が必死で助け出そうと男の子の腕をつかみ引つ張っていた。

状況を理解した俺は駆け寄りもう片方の男の子の腕をつかみ後ろに飛ぶ。

だがいくら引つ張ろうともびくともせず、逆に飲み込まれている部分が増えていつていつているように見える。

「茜、もういいよ」

男の子が諭すように女の子に言う。

「やだよ、なんでそんなこと言うの」

泣きじゃくりながら否定する。

「お兄さんもありがとうございました」

俺にお礼をして掴まれている腕を振り払らおうとした。

女の子は振り払われた勢いで後ろに倒れ込んだ、俺の方は力の違いから掴んだままだ。

周りを見渡しても誰もいないから応援は見込めないしどうしたものか。

引つ張る力を緩めずに考える。

後ろで女の子が起き上がりこちらに駆け寄る。

「あっ」

後ろでそんな声が聞こえ、背中にどんと何かがぶつかった。

えっ、と思いき後ろを振り返るとこちらに駆け寄っていた女の子が転んでいた。

そして、そのぶつかった衝撃で俺と男の子は啞然とした表情を浮かべたまま光の塊に飲み込まれていった。

「翔」

女の子の叫び声を聞きながら俺は意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2017t/>

---

ツバサを持つ者

2011年5月20日17時55分発行